2019/7/28　中野教会　「聖書の学び」

　　　　　　　　　　　**「中間期の学び：安息日」**

　マカバイ書は中間期における文書として代表的なものですが、そのマカバイ書で扱われているテーマのうち、本日は「安息日」について文書に当たりたい、と思います。その中から旧約聖書における安息日の意味を考え、またどうしてイエス様は安息日に否定的と思われることをおっしゃられたのか、さらには、キリスト教、イスラム教における集団礼拝の時とユダヤ教における安息日の関連について考えてみたい、と思います。

　まず、マカベア書で安息日について語っている箇所を見ていきます。まず第一マカベア書です。1:43-45に「また、イスラエルの多くの者たちが、進んで王の宗教を受け入れ、偶像にいけにえを献げ、安息日を汚した。 更に、王は使者を立て、エルサレムならびに他のユダの町々に勅書を送った。その内容は、他国人の慣習に従い、 聖所での焼き尽くす献げ物、いけにえ、ぶどう酒の献げ物を中止し、安息日や祝祭日を犯し」とあります。あの悪名高きシリヤ王アンティオコスIV世エピファネスがユダヤ人に対し、ギリシャ風の礼拝をするよう命令をだしたことへのユダヤ人の反応について記されています。BC167年のことと推測されます。背景として、ユダヤにおける二つの派について申し上げなければなりません。アレキサンダー大王の死後、ユダヤはエジプトのゆるい支配のもとに置かれますが、経済的に一帯は成長を遂げ、パレスチナの地の徴税権を得たトビト家等、商業資本がユダヤ社会における富裕層・上流階級を形成しました。彼らは国際派であり、ギリシャ化に積極的でした。ヘレニズム派と言います。これに対抗していたのは、地方の祭司を中心とする人々で、エズラ以降のユダヤ教を守っていこう、という人々でした。その中心はトーラーと称せられた律法です。律法は端的に言えば十戒に表されている、といえますが、当時の状況の中で大切なこととされていたのは次のような、ことです。①割礼、②食物規定、③安息日、④神殿礼拝、⑤年間祭儀、⑥異教徒との結婚禁止などです。これらを守って、ユダヤ人らしい生活を維持しなければならない、とするのがこのグループの人の言っていることです。伝統派と名付けられます。

今引用した第一マカベイ書の箇所で「イスラエルの多くの者たちが、進んで王の宗教を受け入れ、偶像にいけにえを献げ、安息日を汚した。」と言われている人々はヘレニズム派の人々です。「多くの者たち」といわれていますから、時代の趨勢としてのヘレニズム化を「先進文化」として積極的に受け入れる人々が多かったことが推察されます。もちろん、彼らとて、ユダヤ教を捨てる訳ではなく、ユダヤ教をギリシャ文化と混淆しようとしていたのです。マカバイ書の記者は伝統派です。マカバイ書の記者は、この伝統派の流れを汲んだパリサイ派の人物であったと推測されます。本日のテーマに添って言いますと、ヘレニズム派の人々は「偶像にいけにえを献げ、安息日を汚した」と言われています。当時、ヘレニズム化の進んだ地域ではデユオニソス崇拝が盛んだったようですので、ここで言う偶像もそれだったのかもしれません。デユオニソスは別名バッカスともいわれ「豊饒神」です。カナンの地には昔から「バアル」という豊饒神がありましたから、それと融合した形で拝まれ、いけにえを奉げていたのだろうと想像されます。「豊饒神」信仰は世界中の現象であり、イスラエルの地も例外ではありませんでした。古い時代から、繰り返し繰り返し、これを偶像崇拝として禁止されてきていますが、なくなりませんでした。新約の時代にもコリント人への手紙でパウロが偶像に捧げた食物を食べてよいか、という問題について論じています。おそらく、地場の豊饒神のことでしょう。

次いで、第一マカバイ書で安息日について語られているのが、本日の箇所です。2:29-41です。シリヤ王エピファネスの宗教迫害に対し反乱を起こしたのがエルサレムとヨッパの中間くらいのところにあるモデインという町に住んでいたマタティアとその四人の息子でした。マタティアは異教の祭壇に生贄を奉げようとした人物を怒りで殺してしまったため、山にこもりました。そのころのことです。マタティアと同様の伝統派の家族が荒野に逃れようとするとき、軍隊が追いかけてきて、争いになりました。伝統派家族の方はその日が安息日であったので、抵抗せず、殺されてしまった、という話です。これを聞いたマタティア達は、戦いの時防衛的に戦うのは許されている、と理解しよう、と決めた、ということです。当時、安息日に関する規定がどの程度具体的に定められていたのかはわかりませんが、安息日に動いて良い距離は1050mが限度とされていたようですので、これでは戦いは出来ない、に決まっています。この根拠になっているのはヨシュア記3:4-の「契約の箱」から離れなければならない距離から来ている、とのことです。この第一マカバイ書の記者は、このように安息日規定を文字通り遵守することを高く評価しているようです。エズラ、ネヘミヤの頃から、「律法遵守」が神の恵みの下に留まることができる条件とされてきましたが、その遵守の仕方が、その精神とか言うのは別にして文字通り守ることが信仰深い人とされていたのではないか、と想像されます。

次いで、第二マカバイ書に行きます。6章にシリヤ王エピファネスの宗教弾圧の具体的な状況が記されています。6:9-11をお読みします。「ギリシア的慣習に進んで従わない者は、殺すことになった。試練の嵐は目前に迫った。 /息子に割礼を施したという理由で、二人の女が引き出された。その胸には乳飲み子をかけられ、彼女たちは公衆の面前で町中引き回されたあげく、城壁から突き落とされた。/また、近くの洞穴に逃げ込み、ひそかに集って安息日を守っていた人々があったが、（エルサレム総督）フィリポスに密告された。その人々は、/尊ぶべき日を守りたいと切望して信仰深く身を持し、あえて防御しなかったので、皆、焼き殺されてしまった。 」とあります。ここでも、著者は殉教に至った人々を高く評価しているようです。「安息日を守っていた」というのは共同で祈ることです。安息日は何を置いても共同で祈る時だということです。一人で祈るのでは安息日の祈りにはなりません。「このような不条理の下で殉教する人を神様は放置するはずはない、再び命が与えられ、幸いな日を送れるようにしてくださるに違いない」という願望と確信が一つになったところに「復活」の信仰が出てくるわけです。従って、旧約での復活は義人の復活です。罪ある者は復活させられないのです。新約のメッセージはこれを突き破っています。罪人が罪なき者とされ復活の恵みに与る、という訳です。

第二マカベア書の安息日関連での次の箇所は8:25-29です。「その日は安息日の前日だったため、追撃を続けられなかったのである。 安息日間際に、彼らは武器を拾い集め、敵どもの武具をはぎ取った。そして、自分たちを見捨てず、今日この日に、初勝利の恵みを注いでくださった主を、あふれるばかりの思いでたたえ、感謝をささげた。 安息日の後、拷問を受けた者、夫を失った者、両親を失った者にも、戦利品の分け前を与え、残りは自分たちとその子供とで分け合った。 分配が終わると、彼らは心を一つにして、「憐れみ深い主よ、今こそあなたの僕らに和解の恵みをお与えください」と主に嘆願した。」とあります。この箇所はマタティアの息子ユダ・マカバイが、 フェニキアの軍隊と戦った時の話です。倍以上の軍隊と戦い、勝利しました。その日が安息日の前日だったので、更に追撃が出来なくなり、感謝の祈りをささげるのみであった、と言われています。安息日が終わってから、戦利品を分けて、主に「和解の恵み」を嘆願した、と書かれています。この勝利が神が和解を受け入れてくれた証だ、というのです。安息日その日には一切の軍事行動はしなかった、ということになります。防御的・自衛の戦いは安息日に許されるが、勝利の戦いにおいて追撃したり、略奪をしたりするのは安息日には許されていなかったのです。戦争の時であっても、安息日規定の最低限の守らなければならない線があったのです。そう考えると、現代の戦争は全くなんでもあり、になってしまっています。罪の極致です。

以上、第一、第二マカベア書において「安息日」が出てくるところをみました。第三、第四マカベア書では「安息日」に関しては直接触れられていません。この中間期はヘレニズム化という大きな波のなかで、世俗の利害に大きな関心をもち、シリヤに妥協的なグループであるヘレニズム派とこれに抵抗しユダヤ教の伝統を守ろうとする伝統派の対立が基本的な対立です。マタティアの反乱はこの伝統派であるハシディームと呼ばれる人たちによるものでしたが、この家系が実際の権力の座につくと、ヘレニズム派に妥協的となり、このハスモン王朝とエルサレム神殿における祭司集団が、サドカイ派と称せられるグループとなって行くのです。理想を掲げた運動が権力を掌握すると、妥協的となり、理想を忘れる結果となるのはどこでも同じようです。対する伝統派はハスモン王朝を見限り、律法遵守を信条とするパリサイ派を形成します。彼らは地方にあるシナゴーグにおける祭司が中心勢力です。職業的には中小商工業者が中心であったろう、と想像されています。彼らの中で律法の研究と教えをする教師が律法学者と呼ばれる人々です。中堅インテリとでもいいましょうか。その律法学者たちが律法の具体化をすすめ、大きな戒律の体系を作って行ったのです。律法の解釈規定をミシュナーと言います。これにその後、教訓的な律法解釈物語が加わり、タルムードという膨大な文書が作られていきます。中間期はこのミシュナー、タルムードの形成過程にある時期と考えられます。安息日についても漸次精緻化され、安息日にやってはならない事柄も、増えて行ったと考えられます。タルムードによればやってはならないことが「39+α」となっています。イエス様の時代にはこれを文字通り守るのは大変なことになっていた、と想像されます。庶民はとても守り切れるものではなかったと、考えられます。

では、「安息日」について創世記までさかのぼってみてゆき、その本来の精神というようなものを見てみたい、と思います。「安息日」の一番最初は創世記2:1-3の創造における第七日目のはなしです。「こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。神は第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。」とあります。まだここには、安息日という言葉は有りませんが、「神が休まれた」日であり、「祝福し、聖とした」と言われています。「休まれた」のところは「sha:bat」という動詞が使われていますが、これがヘブル語での安息日の言葉になります。ギリシャ語では「sabato:n」と言います。英語ではsabbathですね。7日で一週という区切りになっています。この7日というのは大変古く、メソポタミア文明に起源があるようです。「休む」日と言いますが、これは日々の労働から解放され「休む」日だ、ということです。アダムは罪に堕ちて楽園追放された時、「あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない」と言われますが、その労働から一週間に一回完全に解放されるのです。イスラエルの歴史に添って言えば、エジプトでの奴隷労働からの解放の意味になります。またこの日は神により祝福された日です。祝福されている状態と言うのは神の恵みの下にある、ということです。神の恵みの最たるものは食事です。そしてこの地で取れるワインです。安息日の夕べ即ち金曜日の夕方は家族で食事を共にし、ワインをいただくことが出来る日である、ということです。週に一回の贅沢とでも言えましょう。そして「聖なる日」です。「聖」というのはヘブル語で「ko:desh」と言いますが、旧約聖書で再重要語の一つです。「神のもの」とすることです。この世から切り離し神の領域に入れられることです。具体的には、日常生活から離れ、シナゴーグにおける共同礼拝に参加することです。そこで神に感謝の祈りをささげることと、賛美をすることがその中心的内容です。キリスト教でも説教が礼拝の主要な部分となったのは宗教改革以降です。

創世記から安息日の意味を推測するとこのようなこととなり、規則によって縛られた安息日などというイメージは全くありません。あるユダヤ教のラビがこの「休息」について三つの次元の休息ということを言っています。①まず一つはこの世界との関係です。休息とはこの世界を人工的になにかにすることをやめて、あるがままにすること、だといっています。環境破壊とか地球温暖化のこととあわせ考えると興味ある見方です。②二つ目は「なすべき責務に拘束されないという自由」だと言います。時計をはずし、時間と言う拘束から解放されることが例示されています。考えてみれば、時間に追いかけられている我々は何なのでしょう。「そもそも時間てなに？」と疑問をぶつけたくなります。③三番目は「終わっていないすべてのことから自分を分離させる」ということです。「あれをしなきゃ、これをしなきゃ」などと言うことから一日、分離してしまうのです。ローソクの火しかありませんから、まともなことはできません。それでよい、ということなのでしょう。この「sha:bat」は本当に心身ともに休ませる時だということでしょう。時間が止まっている、という表現も許されるかもしれません。

この安息日が出エジプト記で更なる意味づけがされます。16:22-30にはモーセが出エジプトの民に日々の食べ物を集めるべきことを指示し、六日目には二日分を集め、七日目には休むべきことを言います。七日目に食物を集めに行った人間は「何もみつからなかった」と言われています。六日目には主の声がありました。「『あすは全き休みの日、主の聖なる安息である。あなたがたは、焼きたいものは焼き、煮たいものは煮よ。残ったものは、すべて朝まで保存するため、取っておけ。』」との声です。ここではまだ創世記での「休息の日」のイメージが強く残っています。この余韻がまだ残っている20章で十戒が始まり、その第四戒が安息日規定です。20:8-11をお読みします。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。/しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。－－あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も－－/それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。」とあります。ここでも創世記における安息日の特徴としての「休息」、「祝福」、「聖化」の３つが出てきています。

しかし、「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」とか、「仕事をしなければならない」とか「どんな仕事もしてはならない。」というように「神の命令」＝「戒律」のような表現が出てきます。直訳すると、「安息日を覚えること、それを聖とするために」、「仕事を為す、必ず」「どんな仕事もすることはない」となりますが、命令形の表現方式ということが出来ます。ヘブル語では命令形を直接使わず、婉曲表現で命令を表すことが多いといえます。この十戒は申命記5:12-15でほぼ同じ表現が繰り返されます。但し、申命記5:15が付加されています。「あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。」とあり、出エジプトの記憶と安息日を覚えよ、がつなげられています。実質命令形の表現となっていることは出エジプトの時と同様です。そして出エジプト31:12-15で安息日が絶対的な神の命令となります。「 主はモーセに告げて仰せられた。「あなたはイスラエル人に告げて言え。 あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるし、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、あなたがたが知るためのものなのである。/これは、あなたがたにとって聖なるものであるから、あなたがたはこの安息を守らなければならない。これを汚す者は必ず殺されなければならない。この安息中に仕事をする者は、だれでも、その民から断ち切られる。/六日間は仕事をしてもよい。しかし、七日目は、主の聖なる全き休みの安息日である。安息の日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されなければならない。」とあり、こうなると「休息」「祝福」「聖化」の安息日とばかりも言っておれません。安息日に仕事をする者は殺されねばならない、という訳ですから穏やかではありません。この表現は神の命令でも最も強い表現の一つと言って良い、と思われます。幕屋に関する細かい規定の最後に思い出したようにこの安息日に関する強いメッセージが出てくるのです。幕屋は礼拝の場ですから安息日と密接な関係にあることは疑いのないところですが、幕屋の造りや祭儀の方式は厳密な手順の遵守が求められ少しの過ちも認められませんが、その流れで、安息日についても定められている、ということでしょう。厳格さが求められるのは理解できるところですが、それによって、「休息」「祝福」「聖化」の安息日が忘れられては元も子もありません

預言者の時代における安息日の扱いは、この安息日に関する2つの傾向が両方出ています。イザヤ書58:13-14では「もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、 わたしの聖日に自分の好むことをせず、 安息日を「喜びの日」と呼び、 主の聖日を「はえある日」と呼び、 これを尊んで旅をせず、 自分の好むことを求めず、むだ口を慎むなら、そのとき、あなたは主をあなたの喜びとしよう。「わたしはあなたに地の高い所を踏み行かせ、 あなたの父ヤコブのゆずりの地で あなたを養う」と 主の御口が語られたからである。」とあり、安息日を「喜びの日」と言っています。他方、エレミヤ書17:21-23では「 主はこう仰せられる。『あなたがた自身、気をつけて、安息日に荷物を運ぶな。また、それをエルサレムの門のうちに持ち込むな。また、安息日に荷物を家から出すな。何の仕事もするな。わたしがあなたがたの先祖に命じたとおりに安息日をきよく保て。しかし、彼らは聞かず、耳も傾けず、うなじのこわい者となって聞こうとせず、懲らしめを受けなかった。』」とあります。安息日に関する強い命令の一端がうかがえます。エゼキエル書20:11-12では「わたしのおきてを彼らに与え、それを実行すれば生きることのできるそのわたしの定めを彼らに教えた。わたしはまた、彼らにわたしの安息日を与えてわたしと彼らとの間のしるしとし、わたしが彼らを聖別する主であることを彼らが知るようにした。」とあり、安息日という、おきてが、神がイスラエルを聖別するしるし、とした、と言われています。

しかし、問題はイスラエルの主だった人物が皆、捕囚の民となり、ペルシャの支配確立ののち帰還した人々がどうしたかです。エズラ、ネヘミヤの時代です。ネヘミヤ9:14-16では「あなたの聖なる安息を彼らに教え、あなたのしもべモーセを通して、命令とおきてと律法を彼らに命じられました。彼らが飢えたときには、天からパンを彼らに与え、彼らが渇いたときには、岩から水を出し、こうして、彼らに与えると誓われたその地を所有するために進んで行くよう彼らに命じられました。しかし、彼ら、すなわち私たちの先祖は、かってにふるまい、うなじをこわくし、あなたの命令に聞き従いませんでした。」とあり、民衆がネヘミヤの言うことを聞いていない様が述べられています。おそらく、民は豊饒神崇拝を中心とする地場信仰に浸っていたのであろう、と考えられます。そしてネヘミヤの堪忍袋の緒が切れた様子が13:15以降に出てきます。「そのころ私は、ユダのうちで安息日に酒ぶねを踏んでいる者や、麦束を運んでいる者、また、ろばに荷物を負わせている者、さらに、ぶどう酒、ぶどうの実、いちじくなど、あらゆる品物を積んで、安息日にエルサレムに運び込んでいる者を見つけた。/それで私は、彼らが食物を売ったその日、彼らをとがめた。また、そこに住んでいたツロの人々も、魚や、いろいろな商品を運んで来て、安息日に、しかもエルサレムで、ユダの人々に売っていた。/そこで私は、ユダのおもだった人たちを詰問して言った。「あなたがたはなぜ、このような悪事を働いて安息日を汚しているのか。/あなたがたの先祖も、このようなことをしたので、私たちの神はこのすべてのわざわいを、私たちとこの町の上に送られたではないか。それなのに、あなたがたは安息日を汚して、イスラエルに下る怒りを加えている。」/安息日の前、エルサレムの門に夕やみが迫ると、私は命じて、とびらをしめさせ、安息日が済むまでは開いてはならないと命じた。そして、私の若い者の幾人かを門の見張りに立て、安息日に荷物が持ち込まれないようにした。/それで、商人や、あらゆる品物を売る者たちは、一度か二度エルサレムの外で夜を過ごした。そこで、私は彼らをとがめて言った。「なぜあなたがたは、城壁の前で夜を過ごすのか。再びそうするなら、私はあなたがたに手を下す。」その時から、彼らはもう、安息日には来なくなった。」と言われています。ネヘミヤは異教徒との結婚禁止を徹底させるためにかなり強権的やりかたをやったようですが、おそらく、安息日についても、これを厳格に守らさせるために強い態度で民衆に臨んだことが想像されます。

そして先に述べたマカベア書の時代になります。その他外典のユディト書、エズラ記（ギリシャ語）にも若干安息日に関する表現がありますが、特段、特徴のあることが述べられている訳ではありません。エズラ、ネヘミヤによる改革以降、後期ユダヤ教が漸次確立し、ハスモン王朝の時代には安息日規定がかなり細かく決められていたのではないか、と想像されます。AD6c頃になってから最終的にまとめられたバビロニア・タルムードでは、耕作に関連した作業で39種類の作業が安息日にはやってならないこととして規定されています。現代の所謂正統派のユダヤ人が遵守している安息日における禁止事項は多岐にわたります。ミルトス社出版の『やさしいユダヤ教Q&A』によれば「敬虔なユダヤ人は、旅行はもちろん、車に乗らず、料理は作らず、電気器具は使用せず（またはスイッチをさわらず）、お金は使わず、ペンも持たず、この1日を他の週日と区別します。」と言われています。スポーツについては控えめにという条件で許されているようです。昔は医療行為も禁止事項だったようです。粉をひくことが禁じられているので薬を用いることは禁止だったそうです。しかし、子供の割礼は許されていました。また長い議論の結果、生死にかかわる問題は安息日に優先する、ということがラビの会議できまったそうです。その他、「傘をさすこと」「電話機を含む通信機器の利用」「ガス、石炭を使用すること」「写真撮影」等です。一言で言えばシナゴーグでの礼拝とあとは家で静かにしていること、といったところです。アメリカのペンシルバニアにアーミッシュという清教徒のグループが住んでいますが、彼らはこれと似た生活をしています。アーミッシュの場合は安息日だけではありません。このグループは宗教改革時に生まれたメノナイトの一種です。スイスで発生し、オランダ経由、アメリカにわたって来たようです。絶対平和主義で徴兵には応じません。おそらく戦争に巻き込まれたら、座して死ぬ覚悟の人たちと思われます。この点ではマカベア書のハシディーム以上です。クエーカー教徒も信条的には同じですが、生活スタイルは現代風許容です。日本では「兄弟団」という名で存在しています。

欧米では土曜日に商業を行うことが条例で禁止されている地域もあるようです。ユダヤ人が経済活動に大きな影響力を持ち、その結果、そのような規則が出来たのではないか、と推測されます。もちろん、日曜日はクリスト教徒にとって「主の日」として特別な日です。キリスト教徒の「安息日」と言っても良いかもしれません。すると、土、日の二日間が経済活動が止まる日になります。確かに、私が東海岸のニュージャージー州のテナフライに住んでいた時は近所のお店では土日は開いておりませんでした。また出張でドイツのフランクフルトに言った時、土日はお店がほとんど空いていなくて、食事をするのも大変だったことを覚えています。東洋系の店主んぽ店だけが開いている、という感じでした。両市ともユダヤ人が結構多い町でした。

他の宗教でもユダヤ教における安息日に近い日があります。イスラム教における共同礼拝（サラート）の日です。金曜日です。「働いてはならない」という面より、「共同の礼拝を行う日」という点が強調されています。クルアーン「女の章」4:104には「あなたがたは礼拝を終えたならば，立ったまま，また座ったまま，または横になったまま，アッラーを唱念〔ズィクル〕し，安全になった時は，（正しく）礼拝の務めを守れ。本当に礼拝には，信者に対し定められた時刻の掟がある。」と記されていますし、また「集会の書」64:9-10には「あなたがた信仰する者よ、合同礼拝の日の礼拝の呼びかけが唱えられたならば、アッラーを念じることに急ぎ、商売から離れなさい。もしあなたがたが分っているならば、それがあなたがたのために最も善い。礼拝が終ったならば、あなたがたは方々に散り、アッラーの恩恵を求めて、アッラーを讃えて多く唱念しなさい。必ずあなたがたは栄えるであろう。」とあります。イスラム教徒が一日五回の礼拝が義務づけられていますがこの金曜礼拝も絶対的義務です。イスラム圏の国に行くと、金曜日正午の前にこの共同礼拝に集まるように呼びかけの声が町中に響くのにお気づきでしょう。イスラムはユダヤ教のアラビア人版ともいえますから、この金曜共同礼拝がユダヤ教の安息日慣習を基礎に置いていることは間違いないことです。しかし曜日は違います。また安息日を破った者への刑罰の規定はありません。仏教国、例えばミャンマーとかタイのような国でも曜日という考え方は昔からあります。水曜日が午前と午後に分かれ、八曜日になっています。しかし、八曜に特別な共同礼拝が義務的にされている、ということはないようです。日本も有数の仏教国ですが、土日に働いてはならない、とか特別な祈りの場がある、というような慣行があったとは聞いていません。現在の慣行は西欧からの輸入文明としての土日の扱いのようです。しかし、「六斎日（ろくさいにち）」と称し、毎月の８・１４・１５・２３・２９・３０日には殺生をしないとか、うそをつかないとかいうような「八斎戒＝はっさいかい」を守る日である、とするものです。しかし、内容的にはユダヤ教の安息日とは大きく異なります。

中間期のパリサイ派の安息日規定順守は現代のユダヤ教正統派を超えるものであったろうと思われます。そうすると一般庶民はこれを守りきるなど無理に決まっています。特に牧畜のような場合、安息日だからと言って、動物の世話を完全停止することが出来るはずがありません。そうするとパリサイ派から見れば、「罪人」になってしまうのですから、救われません。パリサイ派の復活は義人の復活ですから、安息日規定を守りきれない一般庶民は、死後も救いに与れず、死者の国シェオールをさまよい、最後はゲヘナに至り、永遠の滅びの運命に定められるという訳です。但し、パリサイ派と言っても、シェンマイ派とヒレル派があり、前者の方が口述伝承も含め文字通りの遵守を勧め、後者はより自由な解釈をしていたようです。使徒行伝5:34にペテロを弁護するパリサイ派議員ガマリエルがでてきますが、この人物はヒレル派であったと考えられます。ヒレル派は安息日解釈においても人間、動物の命にかかわるような事態においてはこれを救う行為は許される、と解釈していたようです。以上のような前提で主イエスの福音書における安息日に関する言動はこのヒレル派の主張を更に先に行ったもので、後期ユダヤ教の律法遵守、その中心的戒律である安息日規定の順守という枠にはまらないものです。そしてそれは、創世記と出エジプト記16章、そして十戒の安息日の定めに示された、「休息」「祝福」「聖化」の安息日に立ち帰るメッセージであった、と言いうると思います。それはマタイ11:28-30「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。/わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。/わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」に凝縮されている、と言えると思います。

もし、金曜日はイスラム教の特別な日であるから、厳に防衛的戦争しかしない、土曜日はユダヤ教において特別な日だから、厳に防衛的戦争しかしない、日曜日はキリスト教において特別な日だから、厳に防衛的戦争しかしない、ということになれば、今、戦争をしているどこの国にもこの三つの宗教者がいると思いますので、週のうち半分は戦争がなくなるのだが、と思っています。戦争は罪の極致です。日本人が戦後「不戦の誓い」をしたことを100年もしないで心変わり、など許されるはずはありません。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日はイスラエルのおける、「安息日」の理解の変遷をみました。また、主イエスが「私のところに来なさい。休ませてあげよう」とおっしゃられた御言葉も思い起こします。恵みの手段としての安息日を甦らせたのだと思います。世界を見るに戦争は絶えることがなく起きています。どうか、安息日を祝う心をもって武器を農具に代える人々を起こしてください。我らの救い主、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）